

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730479

研究課題名(和文)低自尊感情者の自己形成過程についての総合的研究

研究課題名(英文)A study on the self-formation process of those with low self-esteem

研究代表者

中間 玲子(Nakama, Reiko)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80343268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：自尊感情と、恩恵享受的自己感(自己を含み込む自己の環境や関係性を肯定する自己感情)とを区別し、自尊感情が低い者の自己形成過程において自尊感情が低いことの問題はどこにあるのかを検討した。自尊感情が低くとも恩恵享受的自己感を高くもつ者は存在し、その者の心理的健康はさほど悪くなかった。ただし、他者との峻別や対立が求められる文脈において主体的に行動できる態度は自尊感情のみが関連していた。恩恵享受的自己感という形式での自尊感情があればある程度人生を肯定し積極的に生きることができる。だが、自己を基盤とした独立した生き方を実現する方向での自己形成は自尊感情が低い場合には難しくなるようであった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at examining what were problems regarding with low self-esteem. Two self-feelings, self-esteem and blessed self-feeling were distinguished. The former was the direct feeling about self-worth and the latter was the indirect feeling about self-worth focusing on its surroundings. There were someone with low self-esteem but high blessed self-feeling and their psychological well-being was not bad. Those with low self-esteem have a mechanism to keep their psychological well-being and it supported their self-formation process. However some aspects of psychological well-being assuming that "self" was independent from others, for instance, maintaining the self-hood even it caused confrontation with others, were positively related only to self-esteem. Self-esteem is necessary in order to actualize their self-formation in the context of understanding that "self is independent".

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：自尊感情 自己形成 恩恵享受的自己感 心理的健康 理想自己 アイデンティティ 思考信奉 対話的自己

1. 研究開始当初の背景

本研究は、低自尊感情者の生きる世界を検討することを通して、低自尊感情者の自己形成過程を明らかにすることを目的とする。第1の課題は、低自尊感情者の認知や感情のメカニズムおよび自己理解や生き方のパターンをとらえ、彼ら独自の自己や生き方への適応のプロセス、および、自己形成への動機づけにおける方向性や関与の程度について検討することである。第2の課題は、低自尊感情者にとっての前向きな生き方の定義とそれを支える要因を明らかにし、ポジティブな自己の形成をめざす認知・感情マネジメントについての実践が、自尊感情の低い者にとってどのような影響を及ぼすのかについて検討することである。これらの検討から、低自尊感情者独自の生きる世界の特徴やメカニズムを明らかにし、それをふまえた自己形成過程の理解をめざす。

2. 研究の目的

自尊感情 (self-esteem) は、古くから個人の適応や心理的健康において必要不可欠なものとしてきた。1960年代以降はそのことが実証的にも検討されるようになり、上記見解を支持する研究は数多蓄積された。その後、自尊感情との関連が指摘される範囲は人間関係、社会的成功、人格的成熟など様々な領域に広がっていき、次第に、自尊感情は社会を適応的に生きるための“社会的ワクチン”とみなされるようになった。

そのような自尊感情の効用についての認識は、日本でも広く共有されつつある。しかし、日本社会における自尊感情の意味は、欧米におけるそれとは異なるという見解が出されて久しい(北山, 1998)。また、自尊感情を高く保つことが適応的な行動や人格において不可欠なものであり、その欠如が心理的、社会的問題を引き起こすという考え方自体を“自尊感情神話”として批判する見方もある(Dawes, 1994)。自尊感情を高めようとする取り組みは、本来の自尊感情をかえって阻害すると懐疑的な見解も提出されている(Cigman, 2004)。

これらの批判を受け、高い自尊感情に対する議論は進んだ。しかしながら、その裏面ともいえる、“低い自尊感情の問題”についてはあまり議論が進んでいないところである。

本研究は、この問題を自己形成の文脈で考えたいと思う。自己形成過程と自尊感情との関連を扱った研究はあまり見られない。自尊感情が低いことによって自己形成過程が阻害されるのであれば、それはその時点での適応のみならず、その後の発達過程においても影響を及ぼすものとなりうる。だが、自己嫌悪感や理想自己と現実自己のずれに直面することによって、一次的に自尊感情が低下したとしても、それによってその後の自己形成過程が促進されることも十分推測される(中間, 2007)。

以上をふまえ、本研究は、低自尊感情者の自己形成過程を明らかにすることを目的とする。この点を検討することによって、自尊感情が低いことは何が問題なのか、何のために自尊感情が必要とされるのか、を改めて問い直し、その議論の本質を明らかにすることができる。そこで、以下の課題を設定し、検討を進めることとする。

(1)低自尊感情者の経験過程の様相について明らかにする

自己は、経験によって形成される。だが同時に、経験過程の認知は自尊感情など自己の様相によって影響を受けることが知られている。では実際には、自尊感情と日常の経験過程とはいかなる関連の様相を示すのだろうか。これについて検討するため、①日常における行動傾向および生活感情、②自己や生き方に対する意識の様相の2側面について、自尊感情との関連を検討する。

(2)自尊感情とは別次元の心理的健康を支える概念を構築し、その概念的特徴を明らかにする

自尊感情が低いことは、実際に議論されているほど問題なのだろうか。自尊感情の低さの意味についてはまだあまり明らかにされていないが、低自尊感情者がすべて不適応の状態に悩んでいるとは考えにくい。そこで本研究では、低自尊感情者における心理的健康の基盤が他に存在する可能性を想定し、その概念を提起すると共に、測定する尺度を作成し、その概念の特徴を明らかにする。

(3) (2)において検討された概念を用い、それとの対比から、自尊感情と自己形成過程との関連について明らかにする。

これについては、生活場面における自己形成過程との関連、個人の主体的意識である自己形成意識との関連から検討を行う。さらに、両概念間の相互関係についても検討を行い、低自尊感情者の自己意識の変容過程についても考察する。

3. 研究の方法

(1)低自尊感情者の経験過程の様相について明らかにする。

①日常における行動傾向および生活感情と自尊感情との関連を検討する。

調査1：行動傾向と自尊感情との関連を検討することを目的に、関西・中京地区の大学生429名を対象とした質問紙調査を行った。

調査2：生活感情と自尊感情との関連を検討することを目的に、関西在住の有職者、20代~50代の男女1469名を対象としたインターネット調査を行った。(調査9, 10の内容と同時に調査した。)

②自己や生き方に対する態度を検討する。

調査3：低自尊感情者における自己態度の主要パターンをとらえることを目的に、23歳~47歳の成人男女10名にインタビュー調査を行った。

調査4：自尊感情と自己意識の高さとの関

連を検討することを目的に、関西圏の中学生1014名、高校生612名、大学生253名を対象とした質問紙調査を行った。(調査12の内容と同時に調査した。)

調査5：自尊感情と自省との関連を検討することを目的に、関西・中国地区の大学生189名を対象とした質問紙調査を行った。

調査6：自尊感情と将来展望との関連を検討することを目的に、小学4年生～高校3年生3389名。小学生655名、中学生1744名、高校生989名に対する質問紙調査を行った。

(2) 自尊感情とは別の心理的健康を支える概念を構築し、概念的特徴を明らかにする

① 自尊感情とは別次元の心理的健康を支える概念として、“恩恵享受的自己感”を構築し、その尺度を作成する

調査7：恩恵享受的自己感に関する尺度を作成することを目的に、大学生306名を対象とした質問紙調査を行った。(調査11の内容と同時に調査した。)

調査8：恩恵享受的自己感尺度のさらなる妥当性を検討することを目的に、関西在住の18～23歳の男女343名インターネット調査を行った。

② 恩恵享受的自己感の概念的特徴を明らかにする。

調査9：恩恵享受的自己感と自尊感情との対比を通して各概念の特徴を明らかにすることを目的に、関西在住の有職者、20代～50代の男女1469名を対象としたインターネット調査を行った。(調査2、10の内容と同時に調査した。)

(3) 自尊感情、恩恵享受的自己感と自己形成過程との関連を明らかにする。

① 自尊感情および恩恵享受的自己感と、自己形成過程との関連を検討する。

調査10：恩恵享受的自己感と自尊感情との対比を通して、それぞれが生活におけるP経験、N経験といかなる関連にあるのかを明らかにすることを目的に、関西在住の有職者、20代～50代の男女1469名を対象としたインターネット調査を行った。(調査2、9の内容と同時に調査した。)

調査11：恩恵享受的自己感と自尊感情との対比を通して、それぞれが生活における積極的態度といかなる関連にあるのかを明らかにすることを目的に、関西地区の大学生306名を対象とした質問紙調査を行った。(調査7の内容と同時に調査した。)

② 自尊感情および恩恵享受的自己感と自己形成意識との関連を検討する。

調査12：自尊感情・恩恵享受的自己感と理想自己への意識との関連を検討することを目的に、関西圏の中学生1081名(M=545, F=515)、高校生642名(M=254, F=387)、大学生333名に対する質問紙調査を行った。(調査4の内容と同時に調査した。)

調査13：自己形成意識、理想自己への意識との関連について、自尊感情と恩恵享受的自己感との関連を明らかにすることを目的

に、関西地区の22～64歳の大学院生197名を対象とした質問紙調査を行った。

③ 自尊感情、恩恵享受的自己感の相互関係について検討する

調査14：自尊感情と恩恵享受的自己感との相互関係性を追跡調査によって検討することを目的に、大阪の高校2年生60名に対する3時点の質問紙調査を行った。

4. 研究成果

(1) 低自尊感情者の経験過程の様相

① 日常における行動傾向および生活感情と自尊感情との関連

行動傾向との関連(調査1) 自尊感情の暗部として指摘される問題のある行動傾向、関係性の様相、適応を阻害する行動傾向との関連を検討した。

生活感情との関連(調査2) 日頃の生活感情と自尊感情との関連を共分散構造分析によって検討したところ、P感情、N感情、S感情、O感情のうち、自尊感情に対する有意な関連を示したのは、N感情およびS感情のみであった。P感情やO感情の高さと自尊感情とはあまり関連がないことが示された。自尊感情が低い者とは、自己動機が満たされる感じが抱けず、また、ネガティブ感情を多く感じている者であるということが示された。

② 自己や生き方に対する態度

自己嫌悪感に対する関わり(調査3) 大学時までの自己嫌悪感のエピソードを語った9名(M=6, F=3)について、それぞれの自己嫌悪感が当時どのように変化していったかについて尋ねた。その結果、解消された場合には、①当該エピソードの終了、②解消への努力、③内容の再解釈、④自己の変化、⑤受容、というパターンが見られた。解消されなかった場合には、⑥自己嫌悪感への長期的曝露、⑦自己嫌悪感の無問題化、というパターンが見られた。

自己意識との関連(調査4) 公的自意識・私的自意識について、相互に他方の自意識特性を統制した上で自尊感情との偏相関係数を検討したところ、公的自意識との間には有意な負の、私的自意識との間には有意な正の関係が示された。

自己省察との関連(調査5) 自尊感情と自己省察および反芻的思考との関連について検討した。その結果、自尊感情は反芻的思考と有意な負の関連を示したが、さほど強い関連ではなかった。省察的思考との関連は有意ではなかった。

時間的展望との関連(調査6) 自尊感情と時間的展望の4下位尺度との関連について検討した結果、特に将来の希望をもつことが自尊感情と関連することが明らかとなった。ただし高校生ではその関係は消失し、計画性との間の有意な正の関係が示された。

課題1に関する成果のまとめ

自尊感情が低いことが自己感情における否定的な様相と関連することは明確に示さ

れたが、自尊感情と行動傾向との関連はあまり明確ではなかった。また、自尊感情が高いことがすなわち肯定的な行動であると見なすことには問題があることが示された。自尊感情の高さと自己意識の高さや内省との関連からは、どれだけ深く考えるかという次元ではなく、自分をどの視点から見るかの次元が自尊感情と関連すること示された。自尊感情の低い人は、自己を見る際に他者の視点に立つ傾向が高いことがうかがえ、自分自身の独立した視点をもつことが自尊感情につながると考えられた。

(2) 自尊感情とは別次元の心理的健康を支える概念の構築、および概念的特徴の解明

① “恩恵享受的自己感” 概念の構築とその尺度の開発

恩恵享受的自己感尺度の作成（調査7）
自尊感情とは別次元の心理的健康を支える概念として“恩恵享受的自己感（blessed self-feeling）”を提起し、その尺度を作成した。7項目からなる尺度が作成され、その信頼性および妥当性が検討された（Table 1）。自尊感情と恩恵享受的自己感は共に、人生満足度および運命悲観と有意な関係にあり、自尊感情が低くても恩恵享受的自己感が高いことによって幸福感は中程度には維持されることが示された。主体性に関する変数（内的統制感、自律性、人生の目的）との関連については、自尊感情は全ての変数と有意な関係にあったが、恩恵享受的自己感は自律性および人生の目的意識とは有意な関係になかった。ここから、他者との対立を含まない場合においてのみ、恩恵享受的自己感も自尊感情同様に主体性に関連する重要な概念となるのではないかと考えられた。

Table 1 恩恵享受的自己感尺度の項目

1. 自分のまわりにはいい人が多い
2. 私は運がいい人間だと思う
3. 私は、友だちや仲間恵まれている
4. 感謝したいことがたくさんある
5. 自分は恵まれた環境に生まれてきたと思う
6. 私は、幸せな偶然に多く出会ってきた
7. なんとなく、「自分は守られている」と感じることがある

恩恵享受的自己感尺度の検討（調査8）
恩恵享受的自己感のさらなる妥当性検討を行った。相互独立性・相互協調性との恩恵享受的自己感との関連から、恩恵享受的自己感は、自尊感情測定においてみられるような、相互協調性による抑制の影響を受けることはないことが確認された。また、プロアクティブパーソナリティと恩恵享受的自己感との関連が有意であったことから、少なくとも他者との対立が想定されない限りにおいては、恩恵享受的自己感も主体性と関連することが示された。

② 恩恵享受的自己感の概念的特徴（調査9）

成人を対象とした場合においても、人生満

足度は、自尊感情および恩恵享受的自己感のいずれとも有意な正の関係にあった。プロアクティブパーソナリティも、自尊感情および恩恵享受的自己感のいずれとも有意な正の関係にあったが、恩恵享受的自己感との関係はあまり強いものではなかった。

その他、“本来感”、“関係の自尊心”、“生活感情”との関連も検討した。本来感は自尊感情および恩恵享受的自己感のいずれとも有意な正の関連を示したが、自尊感情との関連がより強いものであった。関係の自尊心は、自尊感情および恩恵享受的自己感両方と中程度以上の有意な正の相関を示した。生活感情についてはP感情、N感情、S感情、O感情の4側面から検討した。その結果、恩恵享受的自己感は、特にP感情およびO動機感情との関連が強く、自尊感情はN感情との負の関連およびS動機感情との関連が強いことが示された。

また思考信奉傾向との関連からは、恩恵享受的自己感は、生活の中で、自分の思考をポジティブに保とうとする傾向と関連が強く、人生や生活に対する前向きな態度との関連は、その努力による影響が示唆された。

課題2に関する成果のまとめ

恩恵享受的自己感の特徴として、次のようなことが考えられた。すなわち、人生満足度や関係の自尊心など、人生や関係性の文脈において自己を肯定することとは関連する。女性においては特に、人生満足度との関連が指摘される。だが、最適な自尊感情とされる“本来感”との関連はさほど強くなく、日常の中で“自分らしさ”をよりどころとして生きるという感覚は弱いと考えられた。また、生活感情の肯定的感情と否定的感情は、それぞれ関連する自己感情が異なることが示された。恩恵享受的自己感は肯定的感情を感じることと関係する。つまり、自尊感情が低くとも、日常生活を楽しく心地よく過ごすことが可能になっている。ただしそれは、自尊感情が低い者が、自身の思考や心構えを肯定的に保とうとする自己制御への努力によって実現している可能性も示唆された。

(3) 自尊感情・恩恵享受的自己感と自己形成過程との関連

① 自尊感情および恩恵享受的自己感と、自己形成過程との関連を検討する。

生活状況との関連（調査10） 個人が生活場面で「自分らしさ」という感覚をどの程度もつことができているのかについて、主要な生活場面のそれぞれにおいて「自分らしさ」を感じることができている程度と自尊感情および恩恵享受的自己感との関連を検討した。

自尊感情は、仕事と勉強の領域において有意な関連が指摘された。それに対して恩恵享受的自己感は、団らん、雑談、社会奉仕において有意な関連が指摘された。対人ストレスについては、自尊感情との間においてのみ、弱い有意な負の関係が示された。

活動スタイルとの関連(調査11) 動機づけスタイルおよび主要活動への取り組みスタイルを検討し、それらと自尊感情および恩恵享受的自己感との関連を検討した。

②自尊感情および恩恵享受的自己感と自己形成意識との関連

理想自己に対する意識との関連(調査12)

恩恵享受的自己感はなりたいたいと思う気持ちの強さに、そして、自尊感情はなれると思う気持ちの強さに、それぞれ関連することが示された。自己形成においては、この両面が伴っていることが必要であると考えられた。

理想自己に対する意識および成長意識との関連(調査13) 効力感と自尊感情との関連のみが有意であり、恩恵享受的自己感と理想志向との有意な関係は示されなかった。

成長意識については水間(1998)にならい、可能性追求得点、努力主義得点をそれぞれ算出した上で検討した。その結果、恩恵享受的自己感と努力主義との有意な正の関連が弱いながらも示された。恩恵享受的自己感は、自己形成における努力過程を支える側面があるのかもしれないと考えられた。

③自尊感情、恩恵享受的自己感の相互関係

(調査14) 3時点における自尊感情および恩恵享受的自己感の関係について、交差遅延モデルによって検討を行った。その結果、3時点を通して同一変数間の相関は有意であったが、自尊感情および恩恵享受的自己感が他方を促す関係はいずれにおいてもみられなかった。

課題3に関する成果のまとめ

自尊感情と恩恵享受的自己感は、自己形成においてそれぞれ担うところが異なるようであった。生活場面において感じられる“自己”の文脈の違いは、自尊感情、恩恵享受的自己感、それぞれが背景として有する“自己観”の違いをより明確に示していた。それぞれが形成する“自己”の側面が異なることが指摘された。

また、自己形成に対する意識との関連については、自尊感情は効力感を高め、恩恵享受的自己感は努力を高めることが示され、それぞれが異なる側面にかかわることが示された。ただし、両者がどのように作用し合うのかについては、今後の課題として残された。

本研究の意義と課題

本研究により得られた意義と課題を、次の3点にまとめた。

第1は、自尊感情と行動との関係を検討し、両者がいかなる関連にあるかを問いただしたことである。自尊感情神話をめぐる批判は、自尊感情と反社会的行動とが関連することがある、自尊感情を高める働きかけによって関係性や積極性がかえって阻害されることがあるといったことであった。本研究の結果からは、自尊感情は個人の心理的健康の指標との関連は強いが、肯定的な行動傾向や生活体験との関連はさほど明確ではないことが

示された。

心理的健康は肯定的な行動を支える上で大事なものである。だが、それを基盤としながら、いかに行動を展開させていくのかという点においては、自尊感情だけではなく、その心理的健康を土台に、自己と課題とを結びつける概念を考慮する必要がある。

第2は、自尊感情とは異なる心理的健康を支える概念として“恩恵享受的自己感”を提出し、そこから自尊感情が低い者の理解を深めたことである。この概念の導入および検討によって、自尊感情が低いことの何が問題であるのかがより明確になった。これまで、自尊感情を高めるために成功体験、受容、ほめ、など、肯定的な経験の蓄積が多く叫ばれてきたが、自尊感情が低い者は肯定的感情を持っていないのではなく、否定的感情を多く経験していることが明らかになった。

ただし、否定的感情と自尊感情との関連が何を意味するのかについては明らかにされていない。その関係の意味をどう理解すべきかによって、自己形成において自尊感情がもつ意味は大きく異なる。今後、慎重に検討していくべきである。

第3は、“自己”をめぐる2つの文脈の相違を明確にしたことである。自尊感情と恩恵享受的自己感との対比によって、両者がふまえる“自己”の相違が明確になった。すなわち、自尊感情における自己とは、他者とは峻別された自己であり、恩恵享受的自己感における自己とは、関係性や環境の中に置かれた自己であり、それらはいずれも、“自分”や“自分の人生”において重要な“自己”として感じられるところであった。

恩恵享受的自己感によって、生活を楽しく生きることにはできるし、心理的健康を保つことも可能である。だが、現在、キャリア教育などで確立を求められているのは、言うまでもなく、他者との峻別に基づく自己である。その文脈の相違をふまえた議論が求められるところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

Nakama, R. & Oshio, A. (2013) The phenomena and dynamism of Magical Thinking: developing a Magical Thinking Scale. Psychologia, 56, 179-193. (査読有)

中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21.

中間玲子 (2014). 自尊感情と心理的健康との関連再考 —「恩恵享受的自己感」の概念提起— 教育心理学研究学, 61, 374-386. (査読有)

[学会発表] (計13件)

中間玲子 (2010). 日常における自己嫌悪感の生起と変化—インタビュー調査によ

る探索的研究--- 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 570. (2010年8月28日, 早稲田大学早稲田キャンパス)

中間玲子・小塩真司 (2010). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(1)---ポジティブ信奉尺度の構成--- 日本心理学会第74回大会発表論文集, 58. (2010年9月22日, 大阪大学豊中キャンパス)

小塩真司・中間玲子 (2010) 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(2)---他の指標との関連--- 日本心理学会第74回大会発表論文集, 59. (2010年9月22日, 大阪大学豊中キャンパス)

Nakama, R. (2010). Transformation of the self needs the progression of time and the temporary abandonment of self-consciousness. 6th International Conference on THE DIALOGICAL SELF. (2010/10/3, Presidento Hotel, Athens, Greece)

Nakama, R. (2011). A study on ways of creating fulfillment in life: The construction of the scale of alternative self-esteem. The 9th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology. (2011/7/28-31, Conference Hall, Yunan Convention Resort, Kunming, China)

中間玲子 (2011). 企画ワークショップ「青年期における自己とキャリアの相互形成過程」企画・司会・話題提供 日本心理学会第75回大会, WS099. (2011/9/15, 日本大学)

中間玲子・小塩真司 (2011). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(3)---自己報告による心身の適応との関連--- 日本心理学会第75回大会発表論文集, 32. (2011/9/15, 日本大学)

中間玲子 (2011) 女子大学生における人生形成プロセスの多様性について---”アウトサイドインーインサイドアウト”の枠組みから 日本青年心理学会第19回大会発表論文集, 32. (2011/11/27, 文京学院大学本郷キャンパス)

中間玲子 (2012). 青年期の自己意識の発達の變化(1)---理想自己と自己意識特性との関連--- 日本教育心理学会第54回総会 (2012/11/23-2012/11/25, 琉球大学千原キャンパス)

Mizokami, S. & Nakama, R. (2012). There are as many views of the self as the self and mes. 7th International Conference on Dialogical Self. (2012/10/25-28, The Georgia Center, The Univevrsity of Georgia's Conference Center & Hotel)

中間玲子・小塩真司 (2012) 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(4)---ポジティブ信奉にはいかなる効用があるのか--- 日本心理学会第76回大会 (2012/9/11-2012/9/13, 専修大学)

中間玲子 (2012). 企画ワークショップ「青年期の自己とキャリアの相互形成過程(2): 大学生活の意味を問う」企画・司会・話題提供 日本心理学会第74回大会 (2012/9/11-2012/9/13, 専修大学)

Nakama, R. & Mizokami, S. (2013). Does the changeability and multiplicity of the self affect beneficially on self-formation or identity-formation? Society for Research on Identity Formation 21st Annual Conference. (2013/5/16-19, Crowne Plaza Riverfront, Saint Paul, MN: USA)

[図書] (計 6 件)

中間玲子 (2010). 自己意識・自己感・パーソナリティ. 岡本祐子 (編) 成人発達臨床心理学ハンドブック ナカニシヤ出版, pp. 51-61.

中間玲子 (2011). 青年期の時間. 発達心理学会 (編) 発達科学ハンドブック 3: 時間と人間 新曜社, pp. 98-112.

中間玲子 (2012). 人格心理学における自己論の流れ. 梶田叡一・溝上慎一 (編) 自己の心理学を学ぶ人のために 世界思想社, pp. 44-62.

中間玲子 (2012) 「揺れるたましい」と「死の欲動」 山中康裕 (監修), 中島登代子・森岡正芳・前林清和 (編) 揺れるたましいの深層---こころとからだの臨床学 創元社, pp. 57-71.

中間玲子 (2014). 感情の発達 日本青年心理学会[企画] 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮[編] 新・青年心理学ハンドブック, 福村出版, pp. 161-172.

中間玲子 (訳, 2014) 貧困 青年期発達百科事典編集委員会[編] 子安増生・二宮克美 [監訳] 青年期発達百科事典(第2巻) 丸善出版, pp. 351-360.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中間 玲子 (NAKAMA, Reiko)

兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・准教授

研究者番号: 80343268

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし